勾玉

笠原 淳

勾玉

笠原 淳

福武書店

笠原　淳（かさはら・じゅん）
一九三六年、神奈川県に生まれる。法政大学経済学部中退。シナリオ研究所、NHK脚本研究会を経て、NHKでラジオドラマ創作、脚色等。その間ドラマ作品「走れドン」にて第一六回芸術祭奨励賞受賞。その後「漂泊の門出」で第一二回小説現代新人賞受賞。「ウォークライ」で第八回新潮新人賞受賞。「本二の世界」で第九〇回芥川賞受賞。著書に『本二の世界』『昆虫図譜』『ウォークライ』『豉羹』などがある。

勾　玉（まがたま）

一九八九年一二月一五日第一刷印刷
一九八九年一二月二〇日第一刷発行

著者　笠原　淳
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二-三-二八
〒一〇二　電話（〇三）二三〇-二一三一
振替口座（東京）六-一〇五〇九七
印刷　大日本印刷
製本所　栗田印刷　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

© J.Kasahara 1989
Printed in Japan

ISBN 4-8288-2320-4 C0093
NDC913 194 212p

勾

玉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

1

店に備えつけの新聞を見ながら、鹿島圭は時折表に目をやった。店の正面は総ガラスで、表通りを行き来する人の群が、それぞれの表情までよく見てとれる。広い通りの向こう側に並ぶ建物に、西陽が反射している。

圭は壁の時計を見て、ビールにすればよかったか、と思った。喫茶店だが、バドワイザーやレーベンブロイも置いてある。そろそろ時分どきということもあったが、店内に暖房がきいていてのどの渇きを覚えてもいた。

入口から通路をはさんで両側に卓が並び、圭はその中程の席に腰を下ろしている。冷たくなった珈琲に口をつけて、いったんはずした眼鏡をかけ直し、日頃買うこともないスポーツ新聞にまた目を戻した。

プロ野球のオフシーズンのトレード情報や芸能人のゴシップ記事に目を通し、それからレジャ

ー案内の欄の下隅にある運勢欄を見た。生まれ月によって勝負運だの愛情運だのを記してある。一月生まれの勝負運は、多くを望まず控え目に。愛情運は、思いやりを第一に、とある。ついでに妻の秋子の生まれ月の項を見た。勝負、見込みなし、手を出さないこと。愛情、相手にばかり完全を求めないこと。帰ったら話してやろうか、と思った。秋子は占いの類いを盲目的に信じるところがある。彼自身は占いが凶と出てもさして苦にはしないが、いい卦が出れば気をよくする。

自分と妻のその日の運勢をたしかめてから、新聞をたたみ、眼鏡をとってまた表に目を転じた。と、数卓へだてた先の席にいる女客に目がとまった。先刻表を見ていたときには気がつかなかったから、彼が新聞に目を戻していたほんのちょっとの間に入ってきたのだろう。モスグリーンのジャケットの衿元が、痩せぎすのせいもあってか細げに見える。薄い縁の眼鏡をかけて、卓上で何か書きものをしている。若くはないが、中年女の重たるさは感じられない。

圭はそのまま女に視線を注いでいた。自ずと顔がほころんでいた。と、俯いていた女が卓に片肘をついて面をあげた。どこを見るというでもなくうつろわせた目が、彼の目と合った。彼は女に目を注いだまま笑いかけた。女の面にとまどいが生じ、眼鏡をとって彼を見直した。女は、あ、と小さく口を開け、はにかみを含んだ微笑を口もとに浮かべた。彼は女に向かってうなずき、飲みさしの珈琲カップを手にして席を立つと、女の卓に近付いていった。

「やあ……羽根ちゃん」

羽根さん、と呼ぶべきかと一瞬迷ったあげく、昔呼びならわした心安い呼び方をした。
「お邪魔かな？」
「いえ、どうぞ」
彼が向かい合った席に腰をかけると、羽根喜久子は卓上にひろげた二百字詰の原稿用紙を隅に片寄せて、
「おどろいた」
と、あらためて面をほころばせた。
「気がつかなかったわ」
「ぼくはすぐに分った。変らないね、羽根ちゃんは」
「そんなことない、もうすっかりおばあちゃんよ」
羽根喜久子は片手を髪にあてた。やわらかくウェーブをかけた髪に白いものが混っている。髪を染めてはいない。いかにも身づくろいに頓着しない彼女らしい、と圭は微笑を誘われた。
「……あ！」
羽根喜久子が不意に圭の顔の前に指を立てて、
「眼鏡、かけてたでしょ！」
「……？」
「さっき、眼鏡かけて、新聞見てた」

「ああ」
「それですぐに分らなかったんだわ」
圭は苦笑して、眼鏡をおさめた上着のポケットに手をやった。
「もう五年ばかり前からつかってるよ」
「あら、そういえばあたしも。もうどのくらいになるかしら。他人のことは言えないわねえ」
コロコロと笑った。
ウエイターが、圭のいた卓から水のコップと伝票を持ってきて、ごゆっくりどうぞ、と勿体つけた挨拶をして退っていった。
「お仕事？」
羽根喜久子が話題をつなぐように訊いた。
「なに、日の昏れるのを待ってるんだ」
「相変らずね」
彼女は笑った。圭は卓上の端の原稿用紙に目をやって、
「なかなか活躍してるじゃない」
と言った。羽根喜久子は、長年勤めた放送局のディレクターを辞めて、フリーのライターとして主に女性向けの雑誌類にエッセイ等を発表している。
「時々名前を見るんでね。ずっと会わなかったという気がしないんだけど……」

圭は羽根喜久子と会うのが何年ぶりになるかと記憶をたぐって、
「おやおや、ざっと十年ぶりだ」
「そんなに……」
「羽根ちゃんは、まだ局にいた」
圭はちょっと言いよどんでから、
「……ハムさんの、葬式以来だ」
「ああ、柳川さんの……」
羽根喜久子は自分の記憶をたしかめるようにうなずいた。
柳川公彦という、圭がラジオドラマを書いていた頃に世話になった局のプロデューサーである。公彦という名から、内輪ではハムさんと呼びならわしていた。それをあらたまって羽根喜久子が柳川さんのと言い直したので、おやと思った。
「もう十年になるんだなあ」
圭はやや大仰に嘆息をした。羽根喜久子と再会するまでの時間ではなく、柳川公彦の告別式があってからという意味での感慨であった。
柳川の告別式については、つい昨日のことのように鮮明に思いおこすことが出来た。柳川公彦が亡くなったことを圭に知らせてきたのは羽根喜久子だった。柳川はとうに局を定年退職していたし、それ以前から圭はラジオドラマの仕事とは縁が切れていたので、不意に電話で訃を知らさ

れて一瞬当惑を覚えた。その辺の事情を心得てか、羽根喜久子はいくぶん言訳めいて、鹿島さんは柳川さんとは特別だったから、と圭が柳川に目をかけられていたことを含んで言った。圭が柳川に付いてドラマ制作に関ったのはさらにさかのぼって十五年も昔のことだし、世話になったのは事実としても何だか古証文を出されたような気がしないでもなかったが、圭はすぐに自分の狭量を愧じて、柳川の訃を知らせてくれた礼を言い、告別式の日時をたしかめた。

告別式は、都内の小さな教会で行なわれた。現役を退いて久しいにもかかわらず、局の関係者が中心になっての盛大な式だった。柳川公彦がカトリック信者として受洗していたことを圭は初めて知って意外な気もしたが、違和感を覚えるほどではなかった。柳川は日本人ばなれのした容貌の伊達男で、なかなかの遊び人でもあったが、仕事に関しては頑なな職人気質をもっていて、制作現場での信頼は厚かった。告別式で弔詞を捧げた人々の中に障害者の団体代表もいて、柳川が局を退職してから視聴覚障害者のためのボランティア活動に力を入れていたことを知った。なに、あれで結構面白い仕事なんだよ、と照れ笑いを浮かべる柳川の様子が思い浮かんだ。狷介なところもある半面、少年のようにシャイな面もあった。

その日、羽根喜久子は受付をつとめていた。圭は弔問に並ぶ列からはずれて、彼女と立話をした。彼女と顔を合わせるのもしばらくぶりのことだった。圭は電話をもらったことにあらためて礼を言い、柳川の死の前後について訊いた。肺ガンで半年ほど入院していたということだった。両切りのピースを半分に千切り、ホルダーに詰めて吸っていたのを思いおこした。柳川さんはガ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

ンだということを知っていたわ、と羽根喜久子は言った。彼女が同僚と見舞いに行ったとき、まだ顔の色艶もさほど衰えは見られなかったというが、おれはガンだよ、と告げ、やりたいことをやってきたからね、もういいや、と悪戯っぽい笑いを浮かべて言ったという。枕もとにピースの缶が置いてあり、彼女たちが訪れると、ホルダーを手にしたが、煙草を吸う気はもう失せていたようだった。そんな話を羽根喜久子から聞いて、病床での柳川公彦の応対は強がりもあったろうが、いかにも彼らしい伊達ぶりだとも思った。

「しかし、ハムさんらしいすっきりした式だったね」

圭はつい最近のことのように言ってから、何か苦いものがのどに支えでもしたような心地になった。

「あのとき、菊の花に囲まれたハムさんの写真を見てね……」

話そうかどうしようかちょっと迷ったあげく、つづけた。

「ハムさんに、まだ何か言われているような気になった。いや、そうじゃないな。言いたいことがあるのに、ハムさんは何も言ってくれないんだ。死んだからじゃなく、生きてたときと同じようにさ」

「どういうこと？」

「うん、つまりね、ハムさんはぼくに何を書かせたかったのかって」

「台本のこと？」

「そう。古墳を舞台にして書いたことがあった。覚えてないかな」
「あ、西都原(さいたばる)の？」
「あのとき、羽根ちゃんがハムさんのサブについてた」
「いえ、サブはAさんで、あたしはまだ使い走りだったわ」
「そうだったかな」
「局に入って間もない頃だったもの。柳川さんとなんてまともに口もきけなかった」
「可愛いときもあったんだ」
「そうよ。でも、ずいぶん昔の話ね」

圭が宮崎の西都原古墳群を舞台にドラマを書いたのは、ざっと数えてみると四半世紀も前のことになる。その当時のことは思い出そうとしても切れ切れな記憶しかない。が、中には妙に鮮明に残っている片々もある。

柳川公彦にサブディレクターとしてついていたAからその企画について伝えられたときのことはよく覚えている。柳川さんが君に書かせたいと言っている、とAから聞いたとき、圭は信じ難い思いで、昂揚した気持を抑えきれなかった。柳川公彦が自ら演出するのは年に一、二本で、それも芸術祭参加とか国際的なコンクール出品など、局でも力を入れる大作に限られていた。それまでに圭の書いた脚本も何本か柳川の目にとまって、人を介して寸評を聞いたりはしていたが、むろん柳川の演出で放送されたことはなかった。柳川さんはあなたを買ってるよ、などと人伝て

に耳にして、それが彼の支えにもなっていたのだが、柳川から直々に声をかけられるとは思っていなかった。

Aに伴われて柳川のもとに顔を出すと、柳川はごく上機嫌で今度の企画について圭に語った。といっても、宮崎に遊びに行ってこようと思うんだがね、どうだい、と冗談半分のような話しぶりで、圭は上気したままうなずいているだけだった。飯でも食いながら打ち合わせをしようか、と局を出て、赤坂の小料理屋に入った。そのときどんなものを飲み食いしたか記憶にないが、銚子を手にして独酌する柳川の時折ふっと放心するさまにとまどったことを覚えている。

打ち合わせといっても、柳川は具体的な話は何もせず、行ってみて好きなように話をこさえたらいい、と言うだけだった。ただ、行く前にあまりあれこれ考えず、白紙の状態で、とりあえず遊んでくることだ、と言った。実際おれはね、宮崎に遊びに行きたいからこの企画をたてたんだ、と、色白の面をほんのり赤らめて笑った。或いは圭の肩の力を抜かせるためにそんなことを口にしたのかもしれないが、半分は本音であったのかもしれない。

局の費用で取材旅行に出かけるなど圭にとっては初めての体験だった。飛行機に乗ったのもそのときが初めてだった。羽田から大阪を経由して宮崎に飛んだ。途中、豊後水道上空で乱気流に遭い、飛行機がドーンと揺れたのに肝を冷やしたり、宮崎空港に降りる直前、窓の外を見ると眼下は海で、しかも主翼の下に車輪が出ているのを見て、ひょっとすると不時着水するのではないかと観念したり、そのようなことを後日圭は滑稽な体験談として知人たちに語った。飛行機に乗

って取材旅行に行ったということが当時はかなり得意でもあったのだ。

宮崎空港には支局の幹部が総出で迎えに来ていて、あらためて局における柳川公彦の権威を知らされた。支局のスタッフが歓迎に気をつかっているのはむろんチーフプロデューサーの柳川に対してで、圭の立場はごく影のうすいものに思われた。柳川は圭の心細い思いを察してそれとなく気づかってくれていたように思う。大淀川の畔のホテルにいったん投宿した後、ホテルの近くの料亭で支局長主催の宴が設けられた。圭は柳川と支局長と並んで上座に着かされた。居心地が悪かったが強いて平静をよそおっていた。仲居がビールを注ぎに来て、一目で主賓と見たのだろう、ためらうことなく柳川の前に膝をついた。と、柳川は無言のまま隣りの席の圭を先にするように手で示した。仲居はちょっと訝しげな顔をしながら、あらためて圭の方に膝をずらせて向き直った。からかわれているような気がしないでもなかったが、柳川が同席の人々に暗黙のうちにしめしをつけたのだとも思われた。

翌日、西都原古墳群を訪れた。宮崎市内から車で一時間ほど北上すると、広大な台地に出る。そこに、前方後円墳、円形墳、方形墳など、三百基余の古墳が点在している。瓊々杵尊の御陵と伝えられる男狭穂塚、木花開耶姫命の陵墓という女狭穂塚、或いは鬼の窟古墳などと、地元の郷土史家の案内で見てまわった。初めは異界に迷い込んだような景観に気持を揺すぶられたが、目が馴れてくると変哲もないものに思われてきた。郷土史家の懇切な説明に一々熱心にうなずく風をよそおっていたが、ほとんど頭に入らず、この茫漠とした古墳群を舞台にいったいどんなドラ

マをつくったものかと思案にくれていた。柳川は、案内人に時折質問をしたりもしたが、それは相手の熱心さに対する儀礼的なものであって、古墳のたたずまいを目にするだけで自足しているように見えた。馴染んでみればただ大小の丘がそこかしこに点在しているだけの古墳群の眺めだが、柳川はいつまでもあかずに眺めているという風だった。後に圭はその折の柳川の様子を思いかえして、彼は何を見ていたのだろうと考えた。自分が見ていなかったものを柳川は見ていたように思われてならなかった。

取材はその一日で終り、翌々日の帰りの便まで自由に過ごすことになった。柳川は、ちょっと私用があるからと言ってその日のうちにホテルを引き払って姿を消した。支局が面倒をみてくれるから、と柳川が言い残していった通り、翌日ガイドつきのハイヤーがホテルに迎えに来て、終日宮崎の観光巡りをした。ガイド嬢が車中でうたった民謡のヨイヨイサッサヨイサッサという囃子ことばを彼はまだ覚えているが、観光巡りにはさして興は覚えなかった。その翌日、空港で柳川に会ったとき、どこへ行っていらしたかと訊くと、都井岬で野生馬を見てきた、と照れ笑いを含んで言った。本当にそうであったかどうか疑わしいと圭は思った。自分は体よく厄介払いをされたという気がして、いくらか拗ねてもいた。

取材旅行から帰って、二週間ほどして一時間ドラマの初稿を書き上げた。早く柳川に見てもらいたいと気がはやり、ゆっくり時間をかけて想を練ることが出来なかった。サブディレクターのAを通じて初稿を柳川に届けたが、一日置いて、原稿を戻された。Aは自分なりの意見をいろい

ろと述べたが、柳川の意見について訊くと、ただ首をひねるだけだった。

ドラマの骨子は、古墳群に偏執的な思いを抱く気のふれた老人とその孫娘、それに都会から戻ってきた若者をからませて、装飾古墳の神話的な世界の彩りを小道具に使い、幻想味の濃い人情話に仕立てたものだった。他愛ないといえばそれまでだが、圭としては非現実の風景をうまく描けたと自負するところもあったのだ。

どこがどういけないのかと、それからまた二週間懊悩したあげく、初稿をすっかり解体し、登場人物に狂言まわしの役どころを加えたり、古墳をあの世との通い路として自在に行き来する気のふれた老人のキャラクターになお工夫を加えたりして、ようやく改訂稿を局に届けた。一日置いて、Aに伴われて柳川のもとに赴いた。柳川は自分の机で別の台本に目を通していた。圭の原稿は机の端に置かれてあった。圭が傍に立っても、柳川は見向きもしなかった。明らかに不機嫌な様子だった。いかがです？　とAが口添えをしてくれた。が、柳川は無言のままだった。その面が苛立ちを怺えかねたように紅潮していた。圭はいたたまれず、黙って頭を下げて引き退ってきた。

結局、その台本は三度書き直したあげく、どうやら放送にこぎつけた。人情話のいきさつは全部切り捨てて、気のふれた老人の狂気の世界だけで物語を終始した。圭としては不安だったが、柳川の機嫌は直ったとAからも聞き、柳川自身からも、まあこんなところだろう、と和んだ口ぶりで言われた。しかし、柳川は満足したのではなく、断念したに過ぎないと圭には思われた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co